

ベルクソンと唯識が語る苦の源泉

—— 苦しみはどこから来て、いかに克服されるのか ——

近藤伸介

一 本論の目的

ベルクソン Henri-Louis Bergson (一八五九—一九四一) は、生涯を通じて精神や意識について考察した哲学者であり、その思想はしばしば唯心論的であると言われ、実際、前期の代表作である『物質と記憶 *Matière et mémoire*』(一八九六年)においてその傾向は顕著である⁽¹⁾。一方、後期の代表作である『創造的進化 *L' évolution créatrice*』(一九〇七年)と『道徳と宗教の二源泉 *Les deux sources de la morale et de la religion*』(一九三二年)(以下、『二源泉』と略)においては、意識あるいは生命が物質と相反する流れとして描かれており、対立する両者が衝突する中で生命体が生まれ、宗教も生まれたとされる。そしてベルクソンが、物質の抵抗に逆らって進化しようとする生命体の根源に見た力が「エラン・ヴィタル *élan vital*」すなわち生

命の躍動であり、さらに進化を完成へと導く偉大な神秘家たちの根源に見た力が「エラン・ダムール *élan d' amour*」すなわち愛の躍動であった。では、こうした世界観を有するベルクソンは苦しみの原因をどこに見ていたのだろうか。ここでは、『創造的進化』と『二源泉』をテキストとして考えてみたい。

一方、仏教では、その最初期から心について深い分析を行っており、苦しみの原因としては初期仏教以来、十二因縁⁽²⁾が説かれてきた。そこでは苦しみの原因が十二の因果の系列で説明されており、中でも第一原因とされているのが「無明⁽³⁾ (*avidyā*)」という真理に対する無知である。では、大乘仏教が生んだ唯心論哲学である唯識 *vijñapti-nātra* では、苦しみの原因はどのように語られているのだろうか。ここでは、唯識の代表的な論書であるアサンガ *Asaṅga* (無著⁽⁴⁾、無着) の『撰大乘論 *Mahāyāna-saṃgraha*』をテキストとして考えてみたい。

以上、本論は、唯心論という共通要素を有するベルクソン哲学と唯識の両思想が語る苦しみの原因と、さらにその克服について考察し、それらを比較検討することを目的とする。

二 原罪の否定

ベルクソン最後の名著である『二源泉』は、次のような言葉から始まる。

【1】禁断の果実の思い出は、我々各自の記憶の中で最も古いものであり、人類〔全体〕の記憶の中でも同様である。もしこの思い出が、我々がより立ち戻りたい他の思い出たちに覆い隠されていなければ、我々はそのことに気づくであらう。(MR, 981/1)

ベルクソンはここで禁断の果実の物語、すなわちアダムとイヴが神の命令に背いて禁断の果実を食べてしまったという創世記の物語が、人類の最も古い記憶として各人の中に刻まれていると述べている。これは人類が初めて犯した罪、すなわち原罪であり、この罪によって人類の祖であるアダムとイヴは樂園を追放され、神から苦しみを与えられ、さらに彼らの子孫であるすべての人類もまた、原罪に由来する苦しみの中に生きること余儀なくされたという。ベルクソンは晩年、カトリックに傾倒しており、『二源泉』を発表した当時は、すでに信仰上はカトリック教徒であったと言つてよい。しかし苦しみの原因に関しては、彼は原罪説を受け入れていない。そのことは、弟子の

ジャック・シュヴァリエに語った次の言葉から明らかである。

【2】原罪、私はそれを理解するに至れなかった。あらゆる過ちは我々に由来し、それが我々に由来する程度においてのみ我々に帰せられる。どうして知らない先祖の罪によって、我々の責任が問われ得るのだろうか。どうして先祖の犯した過ちが、我々に帰せられ得るのだろうか。私は時間の理論でその難題を解決しようと努めたが無駄だった。解決には至らなかつた。(Jacques Chevalier, *Entretiens avec Bergson*, Paris, Plon, 1959, p.159)

ベルクソンはこのように、会ったこともない遠い昔の先祖の罪がなぜ我々に帰せられなければならないのか理解できない、と語っている。人類の苦しみの原因が彼にとつて大きな関心事であつたことは間違いない、彼は原罪の問題を合理的に理解しようとしたが徒勞に終わったと告白している。この言葉が語られたのは、『二源泉』の出版と同じ一九三二年である。よつて、ベルクソンは『二源泉』において、彼独自の視点から原罪とは異なる苦しみの原因を見出している。

三 物質の過剩

ベルクソンはよくオプティミスト(樂觀主義者)と評される。しかし『創造的進化』と『二源泉』を見る限り、彼にはこの世界を悲觀的に見ている面が確かに存在する。一例として、『二源泉』には次のような記述がある。

【3】我々の苦しみは、我々がそれを思い返すことで、果てしなく延長され、増大する。ともかく、「神の立場から世界のあらゆる害悪を肯定しようとする」ライブニッツの『弁神論 *Theodicee*』に数節を付け加えることは容易であろう。しかし我々はそれをしたとは全く思わない。哲学者は自分の部屋で一人、この種の思索を楽しむこともできるだろう。しかし自分の子の死を目の当たりにした母親の前にして、彼は何を思うだろうか。否、苦悩は恐るべき現実である。そして、害悪を実際にそのあるがままに帰してもなお、ア・プリオリに害悪をより小さな善として定義することは、耐え難いオプティミスムである。(MR, 1197/277)

こうした言葉から、彼がただのオプティミストでないことが分かる。また、この世界における生命体の在り方も、ベルクソンによれば、理想的なものではないという。彼の後期の著作に描かれた現象世界は、生命と物質という二つの対立する流れが衝突し、その中で生命体が生じ、進化していく世界である。彼は『創造的進化』において次のように語っている。

【4】実際には、存在のある流れとそれと対立する流れとがあるに過ぎない。あらゆる生命の進化はそこに由来する。(EC, 652/186)

【5】これら二つの流れの内、第二のもの〔「物質」〕は第一のもの〔「生命」〕に逆らうが、第一のものはそれでも第二のものから何ものかを獲得する。そこから両者の間に一

つの *modus vivendi*〔生存様式あるいは妥協案〕が生じるのであり、それがまさに有機組織である。(EC, 707/250)

【6】エラン・ヴィタルが伝達する運動は、ある時は逸脱し、ある時は分裂し、常に妨げられているが、有機的世界の進化とはこの戦いの展開に他ならない。(EC, 710/254-256)

【7】人間と共に、意識は鎖を打ち砕く。人間において、人間においてのみ、意識は自らを解放する。そこに至るまでのあらゆる生命の歴史は、物質を持ち上げるための意識の努力の歴史であり、また意識の上に落下した物質が意識を多少とも完全に押しつぶした歴史であった。(EC, 719/264)

ベルクソンによれば、こうした物質との衝突の中で、生命体は困難な道をたどりながら進化してきたという。その困難の理由は、エラン・ヴィタルの力が有限で、物質を有利に利用できるほど十分に強くなかったためであるという。

【8】もし生命に内在する力が無限の力であったなら、それはおそらく本能と知性を同じ有機体において果てしなく発展させたであろう。しかしすべての事柄が、この力が有限で、発現するやいなや尽きてしまうことを示唆しているように思われる。同時に多数の方向において遠くまで行くことは、この力には難しい。(EC, 615/142)

ベルクソンが理想とする生命体の在り方は、一つの個体の中

で、本能と知性の両方が果てしなく発展していくというものがある。しかし現実には、物質に対抗する生命の力が十分でないため、生命体の寿命は有限となり、その進化は個体から個体へとエラン・ヴィタルを伝え、少しずつその潜勢力を発現させていかねばならない。ベルクソンは生命と物質が理想的なバランスで調和した世界について、次のように語っている。

【9】これら「理想的な」世界の各々では、エラン・ヴィタルと生の物質とは、創造の相補的な二つの側面をなし、生命は物質のおかげで、その細分化を経て「個々の生命体として」区別されるものとなり、生命が自らの内に有する諸力も、それらを表面化する物質の空間性が許す範囲で、共に一体を成したままでいるだろう。(MR, 1193/272)

こうした理想的な世界では、エラン・ヴィタルと物質は互いに補い合って創造の両輪となり、生命は物質の貢献によって、一つの身体の中でその様々な潜勢力を顕現させていくことになるという。しかし、現実世界ではこうした両者の関係は実現されなかったとベルクソンは続ける。

【10】こうした相互浸透は、我々の惑星上では可能でなかった。あらゆる事柄から見て、生命を補足するものとしてここに見出される物質が、その「生命の」エランを利するようにならされてきたとは、ほとんど信じられぬ。(MR, 1193/272-273)

ベルクソンによれば、現象世界における物質と生命のバランス

は理想的でなく、物質の力が必要以上に強いため、生命はその本来の力であるエラン・ヴィタル及びエラン・ダムールを十分に発現することができない。生命に対して強過ぎる物質のせいで、生命体は行動や寿命を制限され、人間は様々な苦悩や不幸を感じるようになる。すなわち、生命に対する「物質の過剰」が人類にとってさらなる進化を妨げ、苦しみの原因となっている。この「物質の過剰」こそ、ベルクソンが見出した苦しみの源泉と言えるであろう。この障害を克服することは極めて困難であるが、ベルクソンによれば、それを成し遂げ、あらゆる苦しみを超越した境地に到達したのが、イエス・キリストを頂点とする偉大な神秘家たちであるという。

四 アーラヤ識という苦の源泉

徹底した唯心論である唯識では、現象世界のすべては我々の心が生み出した表象(āyatana)である、と説かれる。よって、そこにはベルクソンが語るような心と物質の対立はなく、物質(rūpa)も表象の一部であり、心から独立した物質は存在しない。唯識では、我々の身体も我々を取り巻く環境も、その一切が心へと還元されて語られる。また唯識では、我々の心の根底には「種子(bīja)」と呼ばれる潜勢力を蓄積した「アーラヤ識(āyavijñāna 阿頼耶識)」が存在し、その種子からあらゆる表象が生じるとされる。よって、我々の心身も現象世界の一切もアーラヤ識の種子から生じる表象であり、あらゆる表象を生

むアーラヤ識は自分という存在の依り所、すなわち存在基盤と
言える。『撰大乘論』には次のようにある。

【11】略説すれば、アーラヤ識の本性そのものは、一切
の種子を有する異熟識 (vipākavijñānasarvajñaka/man par
smin pa'i man par shes pa sa bon thams cad pa) であり、それ
によって三界の一切の身体と一切の境遇 (gai/gyo ba) が
包摂される。(D.4048.ri.7a6-7, P.5549.II.7b8)

ここではアーラヤ識が一切の種子を有し、三界(欲界・色界・
無色界)のすべての身体と境遇をその内に含む、と述べられて
いる。こうした存在基盤が心の根底に存在すると唯識は説く。

仏教では、無常なるもの、移ろいゆくものである現象世界の
すべては苦しみである(一切皆苦)と説かれ、苦しみの原因と
して十二因縁が説かれている。これは、誰もが避け得ない「老
死 (jara-marana)」という苦しみからその原因を遡っていき、
最後の「無明」に至るまで、十二の因果の系列によって苦しみ
の原因を説明するものである。中でも第一原因とされる無明と
は、「四諦」⁽⁴⁾や「四法印」⁽⁴⁾といった、仏教が明らかにした真理
に対する無知を意味する。すべての衆生はこの無明という根本
的無知にとらわれているが故に、苦しみの生を受けることにな
るといふ。そして唯識では、この無明が深層心理の意識と結び
付けられて語られている。その意識とは、表層心理である前六
識⁽⁵⁾の中の意識 (manovijñāna) とは別に立てられ、後に第七識の
「マナ識 (manas 末那識)」と呼ばれるものである。

それでは『撰大乘論』に基づいて、無明について見て行きた
い。そこには、前六識から離れて存在する根本的な無明として
「独立の無明 (avejika-avidyā/ma dres pa yi ma rig pa 不共無明)」
が説かれている。

【12】真如の意味へと向けられた心にとって、障害となる
ものが常に現起していること、それが独立の無明とされ
る。(D.4048.ri.4a7, P.5549.II.4b7-8)

独立の無明とは、真理を求める心にとつて、常に障害となる
ものであるという。そしてこの無明は、前六識の意識とは別の
意識と結び付いているという。『撰大乘論』ではその意識を「汚
染の意 (klista-nānāsi/yon mongs pa can gyi yid 染汚意)」と呼び、
これが前六識を汚染する依り所となっているという。

【13】「汚染の意は」無明と常に結び付いており、それは
「前六」識を汚染する依り所である。「前六」識は第一の依
り所(「アーラヤ識」)によって生起し、第二(「汚染の意」
)によって汚染あるものとされ、「前六識は」対象を認識す
るから識である。(D.4048.ri.3b7-4a1, P.5549.II.4a6-7)

ここでは、汚染の意がアーラヤ識に次ぐ第二の依り所と呼ば
れており、それが無明と常に結び付いて前六識を汚染している
という。このように『撰大乘論』では、苦しみの根本原因であ
る無明が汚染の意と共に語られている。そして、汚染の意は前
六識と同様、アーラヤ識に蓄積された種子から生じるとされ
る。よって、唯識における苦しみの原因を突き詰めれば、無明

と結び付いた汚染の意のさらなる原因であるアーラヤ識ということになる。我々の存在基盤であるアーラヤ識こそ、唯識が語る苦しみの源泉と言える。

五 『二源泉』が語る苦しみの克服

ベルクソン哲学における苦しみの源泉が「物質の過剰」にあるとすれば、苦しみを克服するには「物質の過剰」に起因する障害を生命が突破することが必要となる。『二源泉』によれば、それは偉大な神秘家たちによって達成されるという。ベルクソンは彼らについて次のように定義している。

【14】我々から見ても、神秘主義の達成とは、生命が表明する創造的努力に触れること、したがってこの努力と部分的に一致することである。この努力は、もしそれが神そのものでなくとも、神から来るものである。偉大な神秘家とは、物質性(matérialité)によって種に割り当てられた諸限界を飛び越え、神の行動を続け、そうして延長していく個性であろう。我々の定義はこのようなものである。(MR, 1162/233)

これによれば、偉大な神秘家とは、物質に由来する生物種の限界を超えていく者であり、神に由来する創造的努力を続ける者である。ここには「神」という言葉が見えるが、ベルクソンは神について次のように定義している。

【15】神は愛であり、また神は愛の対象である。あらゆる

神秘主義の貢献はそこにある。(中略) 神の愛とは神に属する何ものかではない。それは神そのものである。(MR, 1189/267)

ここでベルクソンは、神とは愛そのものであると語っている。そしてその愛は、万物の根源において、とりわけ我々人間の感性と理性の根源において働いているという。

【16】そのような愛は、その他の事物「の根源にあるの」と同様に、感性と理性とのまさに根源 rachine にある。その愛は、神が自身の被造物に抱く愛、すべてを創造した愛と一致しており、尋ねることができる者に創造の秘密打ち明けるであろう。その愛は道徳的というより、遙かに形而上学的本質のものである。その愛は神の助けを伴い、人間種の創造を完成したがっているだろう (MR, 1174/248)

人間という種を完成へと導くこうした愛の力は、ベルクソンがエラン・ダムールと呼んだものである。このエランはすべての人間、すべての被造物の根源に潜在するが、それを顕現させ、自らの内で働かせることのできる者こそ偉大な神秘家たちである。彼らはまず観想の中で神との一体化を経験し、さらに神が「闇夜 nuit obscure」と呼ぶ大きな喪失感を経て、ついに神との完全な合一を迎えるという。

【17】「闇夜」を経た今、「神秘家の」魂によって、かつ魂の内で働くのは神である。よって、合一は全面的であり、従って決定的である。(中略) これ以降、魂にとって、そ

それは生命の氾濫である、と言おう。それは計り知れないエランである。それは最も広大な企ての中へと魂を投げ出す、抵抗できない衝動である。(MR, 1172/245-6)

こうして愛そのものである神のエラン、すなわちエラン・ダムールは、今や神秘家を通して世界へ溢れ出ることになる。

【18】神秘家は、真理が現に働く力としてその源泉から自身の内へと流れ込むのを感じた。太陽がその光を放出せずにはいられないのと同様に、神秘家はその真理を広げずにはいられない。(中略) というのは、神秘家を焼き尽くしているその愛は、もはや単に人間が神に抱く愛ではなく、神がすべての人間に抱く愛だからである。神を通して、かつ神によって、神秘家は神の愛で全人類を愛する。(MR, 1173/247)

ここに至って、生命は物質の抵抗を乗り越え、進化を完成させる。ベルクソンによれば、エラン・ダムールの顕在化こそ進化の目的であり、それを実現する偉大な神秘家こそ全生命体の存在理由である。そして偉大な神秘家が最終的に到達する境地を、ベルクソンは次のように表現している。

【19】快樂と苦痛の彼方に位置した、神秘家の最終的な魂の状態である、混ざり気のない喜びが存在する。(MR, 1197/277)

こうした神秘家の最終的な魂の状態、すなわち快樂も苦痛も超越した純粹な喜びの境地とは、仏教で涅槃(nirvāna)と呼ば

れるものと同質のものであろう。

六 『撰大乘論』が語る苦しみの克服

唯識における苦しみの源泉がアーラヤ識にあるとすれば、苦しみを克服するにはアーラヤ識を対治し、最終的に消滅させることが必要となる。『撰大乘論』には、アーラヤ識を対治し、解脱に導く因として「聞熏習の種子(srutavasānābija/hos pati bag chags kyi sa bon)」あるいは「法身の種子(dharmakāya/ba chos kyi sku'i sa bon)」が説かれている。この種子は、清浄法界から流れ出た仏法を聞くことで我々衆生の心に熏習され、現象世界において働くこととなる。それが衆生にとって解脱への第一歩となるのだが、『撰大乘論』によれば、聞熏習の種子は、他の種子と異なり、アーラヤ識に蓄積されるのではなく、「法身(dharmakāya/chos kyi sku)」あるいは「解脱身(vimuktakāya/nan par grol bai lus)」に蓄積されるという。

【20】そこで、聞熏習の種子は、下等も中等も上等も、法身の種子と見なければならず、アーラヤ識を対治するものであるから、それはアーラヤ識自体ではないし、世間であっても、世間を超えた極めて清浄な法界から流れ出たものであるから、世間を超えた心(lokotara-citra/jig ren las 'das pati sems)の種子となるのである。(中略) [よって聞熏習の種子は]「初学の菩薩たちにとっては、世間であつても、法身に包摂され、また声聞や独覚たちにとっては、解脱身

に包摂されると見なければならぬ。(D.4048.ii.1067-11a3, P.5549.ii.1166-12a2)

アーラヤ識は衆生の生存に関わるあらゆる種子を包摂し、衆生の存在基盤となるものであるが、それに対して「聞熏習の種子」を包摂する法身と解脱身は、解脱にのみ関わるもう一つの存在基盤である。よって、衆生にとって主となる存在基盤はアーラヤ識であるが、『撰大乘論』によれば、聞熏習の種子が増大していくと、それと反比例してアーラヤ識は減少していくという。この聞熏習の種子の増大が最終的に転依、すなわち解脱における存在基盤の転換を引き起こす、とアサンガは言う。

【21】それ〔「聞熏習の種子」〕はアーラヤ識ではなく、法身や解脱身に包摂されるのであり、下等から中等、上等へと〔聞熏習の種子が〕次第に増大していくに従って、異熟識〔「アーラヤ識」〕は減少していき、依り所もまた転換する。(D.4048.ii.11a3-4, P.5549.ii.12a3-4)

我々の二つの存在基盤であるアーラヤ識と法身(あるいは解脱身)は、ベルクソン哲学における物質と生命のように、互いに相反する関係にあり、一方の増大が他方の減少を引き起こす。よって、聞熏習の種子が法身に蓄積されるに従って、アーラヤ識は減少し、遂には消滅することになる。

【22】依り所があらゆる点で転換した時、一切の種子を有する異熟識〔「アーラヤ識」〕もまた、種子の無いものとなり、またあらゆる点で断ぜられるのである。(D.4048.

ii.11a4, P.5549.ii.12a4)

こうしてアーラヤ識の種子が消滅し、我々の存在基盤がアーラヤ識から法身へと完全に入れ替わることが『撰大乘論』の語る転依であり、般涅槃である。ここにおいて、『撰大乘論』が語る苦しみの克服は完成する。苦しみの根本原因であるアーラヤ識を減少させ、最終的に消滅させることで、我々はあらゆる苦しみから解放されるのである。

七 結論

以上、『創造的進化』と『二源泉』に代表される後期ベルクソン哲学と『撰大乘論』が語る唯識における、苦しみの原因とその克服について考察した。両者は、現象世界を苦しみと見る点で一致していたが、苦しみの根本原因については見解を異にしていた。前者には、物質と生命の対立という図式があり、両者の衝突におけるバランスの不均衡、すなわち「物質の過剰」が苦しみを生む源泉となっていた。一方、後者には、アーラヤ識という現象世界の一切を表象として生じさせる存在基盤があり、これが無明と結び付いた汚染の意を生じさせることで苦しみの源泉となっていた。また前者では、偉大な神秘家たちがエラン・ダムールを発現させることで、物質の抵抗を乗り越え、純粹な喜びの境地へと至り、そこで苦しみは克服されるとしていた。それに対して後者では、アーラヤ識とは別に、解脱に至るための存在基盤として法身が語られており、互いに相容れな

い両者の関係性において、最終的に法身の増大がアーラヤ識を消滅させることで苦しみは克服されるとしていた。

このように、両思想は唯心論という共通要素はあるものの、苦しみの源泉とその克服については異なった視点から語っていた。そして今回の考察により、両思想にはそれぞれ、物質と生命、アーラヤ識と法身という相反する二つの対立が語られており、それら対立の構図が両思想の世界観を形成する上で、共に重要な役割を果たしていることを明らかにできたであろう。

《略号》

EC : *L' evolution créatrice.*

MR : *Les deux sources de la morale et de la religion.*

EC や MR にごうは、Henri Bergson, *Oeuvres*, Paris, Press Universitaires de France, 1959 を用い、引用にはそのページ数を記した。

D : *de dge ed.* (チベット大蔵経デルゲ版)

P : *Peking ed.* (チベット大蔵経北京版)

『撰大乘論』のチベット訳にごうは、*de dge ed.* は Tibetan Tripitaka, *Bstan gyur*, preserved at the Faculty of Letters, University of Tokyo, 1980-1981 を用い、また *Peking ed.* は影印西蔵大蔵経(大谷大学監修、西蔵大蔵経研究者編集、昭和三十三年)を用い、引用にはそれぞれのページ数を記した。

- (1) 著者は、二〇一五年六月、東洋大学で開催された比較思想学会第四二回大会において、「ベルクソン哲学と唯識」と題し、ベルクソン哲学における唯心論的傾向を指摘し、それを唯識と比較する発表を行った。この発表に基づく論文「ベルクソン哲学と唯識」が『比較思想研究 第四二号』(一一七―一二五頁)に掲載されている。

(2) 十二因縁は仏教の初期から語られており、相応部経典の縁起経

Paiccasamuppāda-sutta には次のようにある。

世尊は次のように言った。「比丘たちよ、縁起とは何か。比丘たちよ、①無明を縁として②諸行が生じる。諸行を縁として③識が生じる。識を縁として④名色が生じる。名色を縁として⑤六処が生じる。六処を縁として⑥触が生じる。触を縁として⑦受が生じる。受を縁として⑧愛が生じる。愛を縁として⑨取が生じる。取を縁として⑩有が生じる。有を縁として⑪生が生じる。生を縁として⑫老死、愁い、悲しみ、苦しみ、憂い、悩みが生じる。そのように、この全ての苦しみの集まりの生起がある。比丘たちよ、これが「縁による」生起と言われる。」(*Samyutta-nikāya, Part II Nidāna-vagga, Oxford, Pali Text Society, 1989.*)

- (3) 四諦あるいは四聖諦とは、仏教が明らかにした四つの真理のこと。苦諦(一切は苦しみであるという真理)・集諦(苦しみには原因があるという真理)・滅諦(苦しみは滅することがあるという真理)・道諦(苦しみを滅する修行の道についての真理)の四つをさす。無明とは、この四諦に対する無知のこととされる。中部経典の正見経 *Sammāditthi-sutta* には次のようにある。

友らよ、実に苦(苦諦)に対する無知、苦の生起(集諦)に対する無知、苦の滅尽(滅諦)に対する無知、苦の滅尽に導く行道(道諦)に対する無知、これが無明と言われる。(The *Majjhima-nikāya Vol.1, Oxford, Pali Text Society, 1993.*)

- (4) 四法印とは、仏教の根本的な教説を四つにまとめたもの。「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂靜」を三法印とし、これに「一切皆苦」を加えて四法印とする。

- (5) 前六識とは、表層心理として作用する六つの心の働きで、「眼識」に「耳識」「鼻識」「舌識」「身識」という五つの知覚作用に、認識作用・思考作用に当たる「意識」を加えて六識とする。
- (こんとう・しんすけ、唯識・比較思想、佛敎大学研究員)